

夏に似合う爽やかな潮風が、堤防に座っている私と浅見先輩の間を通り抜けていく。学校から一時間かかる場所にあるせいかな、同じ制服を着た人も姿はない。堤防の後ろは二車線の道路があり、その奥は住宅街があるけれど十六時半という中途半端な時間帯のせいかなすれ違う人も居なかった。目の前には絵に描いたような青色の海が広がっていて、時より反射する太陽の光が星のように見える。

「今日も拾いに行く？」

浅見先輩はポケットから白色の有線イヤホンを取り出しながら、隣に居る私に声を掛ける。

拾いに行く。それは私と彼にしか知り得ない、イヤホンを片方ずつ耳にはめて互いの好きな曲をひとつずつ聴こうという合言葉だった。先輩曰く片方は音楽を、もう一方は漣が聞こえる状態で音を聞くので、それが本来の意味を持つ「拾う」動作に似ていたからこれを合言葉にしたそう。確かに知ってる曲ならまだしも、知らない曲だと歌詞は意識しないと理解はできない。その行動を「聴く」ではなく「拾う」という本来の意味とはまた別の意味を含ませる言葉遊びが好きで彼らしいことだと思った。

私は彼の問いに頷いて、先輩から右耳に付けるイヤホンの先を手取る。そのあと、先輩はイヤホンの接続部分をスマホに繋げ、音楽アプリを開く。「今日はどうしようかな」と先輩の悩む姿が、私の為だけに選んでくれている感じがして嬉しくなる。

「流してもいい？」

「はい、大丈夫です」

そう言って浅見先輩が耳にイヤホンをはめたのを確認したあと、自分もイヤホンを右耳にはめる。しばらくするとエレキギターの音が鳴り始め、聞き覚えのある男性ボーカルが歌い始める。聞こえてくる歌詞は日常を切り取ったようなものだった。

曲が終わるとどちらかともなくイヤホンを外す。私と彼の間で置かれたイヤホンが接続されたスマホの画面を見ると、back numberの『泡と羊』という文字が表示されていた。先輩を見るとすぐに目が合い「今までと違ったでしょ」と少し恥ずかしそうに笑った。

「はい。なんか、意外でした。先輩こんな曲聴くんですね」

「うん、実は最近ハマってます。暇さえあればずっと聴いてる」

「私、『高嶺の花子さん』なら知ってます」

話題を広げようと、私は彼らの曲で唯一知っているものを挙げる。すると先輩は「あの曲

「いいよね」と嬉しそうに呟いた。

「題材がありそうでなかったし、何より今すぐにでも目の前に現れて自分のものにしたかったって思ってるのに『僕のものになるわけないか』って諦めてる感じがすごい好き」

しばらくは彼らの曲を流すかもしれない、と恥ずかしそうに笑う先輩を見て嬉しくなる。ハマった歌手を一番に共有してくれることが嬉しかった。

「はい。次りりさんの番」

りりさん。それは浅見先輩が私を呼ぶ名前だった。

彼に自己紹介した時、周りの人と同じように『新井^{あらい}さん』と呼ばれると思っていただけで、「響きが鈴みたいで他の人と被らなそうだから」という理由で『りりか』を略してさん付けした『りりさん』と呼ばれるようになった。彼以外に『りりさん』と呼ぶ人は居ないので、特別な感じがして少し嬉しかった。

浅見先輩はイヤホンの接続部分を私に渡す。それを私は受け取って、自分のスマホに接続する。音楽アプリを開いて、お気に入りの曲が入っているプレイリストを表示させる。歌手に限らず好きだと思った曲はすぐに追加しているので、488曲になる。

「ゆっくりで大丈夫だからね」

悩んでいる私に先輩が声を掛ける。「待ってる時間も好きだから」と目の前に広がる海を見ながら呟く彼に、安心感を抱く。

ふと潮の風が頬を撫でた。目の前にある海に目を移すと、空の青と海の青が綺麗に重なり、水平線が見える。それは夏を象徴しているように思えて、夏ソングにしようと思いつつ。

「先輩、流しても大丈夫ですか」

「うん、いいよ」

先輩が左耳にはめたのを確認して再生ボタンを押してスマホを中央に置く。私が選曲したのはMrs. GREEN APPLEの『サママ・フェスティバル!』だった。彼らの代表曲のひとつ『青と夏』も有名だけれど、個人的には明るい曲調だけれど、どこか寂しさを感じさせるような歌詞がこの曲の方が私は好きだった。

「なんか、夏ソングっていう感じはもちろんするんだけど、ライブで歌ったらすごい盛り上がりそう」

浅見先輩はイヤホンを外しながらそう言った。

「俺、あの、テレビでよく流れてるもう一つの曲、えっと……『青と夏』? は知ってるん

「ただ、この曲も有名なの？」

「いや、別に『青と夏』ほど有名じゃないんですけど、個人的には今流した曲の方が好きで」「なるほど」

そうなんだ、と呟いて先輩は自分のスマホを操作し始める。しばらくの間があって「歌詞調べてみたけど、確かに今流してくれた曲の方が俺も好きかもしれない」と楽しそうに笑った。それが自分の思いを共有できたような気がして嬉しかった。

「りりさんの流してくれた曲で思い出したけど、七月上旬なのにもうすっかり夏だね」

浅見先輩が後ろに手をつきながら呟く。夏服である白いワイシャツを着て黒髪が潮風に揺れる姿は、青春小説に出てきそうな風貌をしていた。学校指定の青と黒が入ったネクタイを緩めているところが、それをより強く思わせる。

「りりさんは夏好き？」

「いや、苦手ですね。嫌いではないんですけど」

顔を覗かせながら訊ねる彼に、私は目の前に見える海を見ながら答える。「それはどういう？」と不思議そうな顔をして再び訊ねる先輩に怒りの感情は見えない。

「言葉にするのは難しいんですけど、なんか……寂しいんですよ」

「寂しい？」

私が口にした言葉の意味が読み取れなかったのか、先輩は不思議そうな顔のまま私を見ている。

「夏って他の季節よりキラキラしてるじゃないですか。えっと、だから、それを手に入れないまま季節が過ぎ去っていくのは寂しいな……って」

私と先輩の間に一瞬の静寂が流れる。彼は驚いているような、はたまた分からないというようなどっちとも取れる表情をしていた。聞こえてくるのは漣の音だけで無音じゃないのが唯一の救いだったけれど、それでもこの間が私を不安にさせた。すみません、忘れてくださいと謝ろうとした時「いや、すごい」と予想とは違う驚きの声先輩の口から放たれた。

「俺は夏好きだけど、そんな深いところまで考えないよ。ただ単純に波の音が心地いいからって理由で夏を挙げてるんだけど」

すごい、と再び驚きの声をあげる先輩に「そんなことないですよ」と首を振って否定する。それがなんだか恥ずかしくて、耳が熱くなっていく。それに気付いたのか、浅見先輩は「大丈夫だよ」と包容力のある声で私に語り掛ける。

「りりさんの考えはちゃんと素敵だから」

そう言って微笑んだ彼の笑顔と言葉に安心する。「そう、なんですかね」と不安を口にすると「うん、大丈夫だよ」ともう一度笑って見せた。

「先輩がそう仰ってくれるなら、少し自信がつくかもしれません」

「ならよかった」

柔らかい顔で笑って目の前に広がる海を眺める彼の横顔は、いつもより優しく見えた。